

卓話 ロータリー青少年交換について ・ Anyway ・

栗原道子会員

浦和北ロータリーから出向して地区青少年交換委員をしています栗原道子です。私は、ローテックスでもあります。ローテックスというのは、青少年交換で一年派遣されて帰国した人のことを言います。1969年に父が会員であった札幌西 RC から、米国のシカゴの郊外のドーナスフローブ RC に派遣されました。日本での3期生になります。当時は誤解や偏見がまだ多くあり、そういう中でも、ホストファミリーには本当の家族のようにして頂き、私の寂しさや悔しさを一生懸命理解してくれて、私の努力や忍耐を認めて、励まし、いつも味方になってくれました。学校にもよく相談に行ってくれたりもしました。一人の人間として認めて、実の娘と同じように支えてくださいました。高校3年生で行きましたので、大変珍しいのですが、無事一年で、現地高校を卒業できたのも多く方々の励ましと支えを頂いたからだだと思います。英語がある程度できるようになるまでの3か月は、本当に辛いものでしたが、とにかく人生で一番凝縮された充実した一年で、いくつかの米国大学からのスカラシップも取れていましたので、帰って来たくないぐらいでした。帰国してから、ずっと「あの一年」にいつも感謝をしており、私は恩返しをしたくて、RC 入会させて頂いたのです。この留学は私の人生に深くかかわっていることは言う迄もありません。大学卒業後、外国銀行であるロイズ国際銀行に入行し、その後、国際団体である YMCA で仕事をすることになったことも留学で培った経験がきっかけです。YMCA の仕事の関係で、ここ30年余りは、2~3週間米国や他で仕事をし、アジアの国にもたびたび行き現地の YMCA の人と仕事をしました。世界中の YMCA が、同じミッションを持っていて、信頼関係がもともとあるのですが、それでも言葉や文化、宗教、人種がちがいます。そういう中で、驚くほどの大きな違い出合っても、極めて自然に受け止めて、いつも対等に、お互いを尊敬しながら仕事のできたのも、国を超えて親友や家族のような人ができたことも、「あの一年」の経験が生きていました。Anyway（ですから）私は、本当に感謝をしています。そしてこの経験は、日本人として日本で生きていく時にも力になっています。青少年交換事業は、国際的で、究極的には平和を作る事業と言えます。私は、RC のこの高校留学はどの留学よりも安全で、しかも最もスペシャルだと思っています。受け入れ RC が支えてくださるだけでなく、その国の人の家族にして頂きながら、学校に通い、友人を作り、知らないことに多く出会い、その国に住み体験的に学ぶ、人間のもっとも大切な心や価値観、そして人格を育てるかけがえのない素晴らしい事業だと思います。さて、Anyway という英語をご存知でしょうか？直訳すれば、どのような方法でも、とか、どのようにしても、とにかく、それにもかかわらず、だから というような意味で、米国では日常の会話でよく使われます。Anyway は、実は16年前アメリカで研修中にいただいた本のタイトルの ANYWAY（それでもなお）です。「Anyway」はケント M. キースの2001年の著作です。キースさんは米国ハワイ州の官僚や大学の学長を務めながら、米国 YMCA の指導者でもあった方です。ベストセラーにもなったこの本は、もともとハーバードの学生であった19歳のキースが大学時代に生徒会の会長をしていて、運営に悩み書いた逆説の10箇条という冊子がベースになっています。その10箇条のなぜか8箇条が何十年もたってから、カルカッタの病院の壁に書かれていて、それを偶然読んだマザー・テレサによって紹介され、その価値が認められ、それがきっかけでこの本は書かれ出版されています。自分でもこの不思議に驚いたというのがキースさんの言葉です。その逆説の10箇条は、私には新約聖書マタイによる福音書を思い起こさせますが、人生の意味を見つけるための逆説の10か条。

Anyway 日本語のタイトル「それでもなお、人を愛しなさい」は、様々な社会の矛盾や現実を語りながら、解かりやすく、それでもなお、人を愛し、逆説的人生を送ることで、この世界に変化をつけましようと呼びかけます。キースさんもロータリアンですので、ベストセラーになって以来全米のロータリー地区大会などでこの本についての講演をたびたびなさっています。それは、この本が、ロータリーの奉仕の精神に通じるものであるからだと思います。

アメリカで私が体験した印象的 anyway のお話をご紹介します。(2つの話を抜粋)

20年余り前、私の友人が2番目の赤ちゃんを妊娠しました。バトルクリーク市立病院での検査の結果お腹の赤ちゃんはダウン症であることが判明し、打ちのめされていたご夫婦はまもなく、病院に呼ばれます。病院の一室で、これから、この特別な赤ちゃんのためにチームが結成されること、そしてこの両親は、これから赤ちゃんが生まれるまで、7か月間、2週間に一回、ダウン症の子どもの親になるための講義を受けに来てください。そう告げられたのでした。そのチームには、医師、看護婦、ダウン症専門理学療養士、保育士、ダウン専門カウンセラー(社会福祉士)がいました。2週間後の2回目の検診のとき、この五人と両親が対面します。『この特別な赤ちゃんは私たちを一つにして協力させる私たちの天使なのです。バトルクリークに住む私たちはこの赤ちゃんの家族です。私たちは神様が地上に送ってくださるこの天使とずっと一緒に生きることを神様から期待されていると思っています。Anyway (いかなることがあっても) あなた方ご夫婦だけには決してしないことをお約束します。どうか安心してください。』と言われます。その約束どおり、生まれてからずっと、アリーシャと名付けられた女の子は、周りの専門性をもって支援してくれる人たちに特別なケアとトレーニングを受けて、現在24歳となり、元気に愛情をいっぱい受けて、自立をして幸せに暮らしています。

高校卒業の為には、アメリカ史、政治経済、英文学、米文学とアメリカの憲法の試験に合格しなければならず、その他の理系の科目は試験を受けて単位を前もって頂くことができました。今日本に来ている留学生は、ほとんど試験をほかの生徒と一緒に受けるということがありませんが、アメリカの学校では、一切そういう事は無く、すべて皆と同じテストを受けるのでした。アメリカ史のテストで辞書は使って良いと言われましたが、どうしても同じ時間では3分の1しか解答できず。「まだ終わってないのでしょうか？明日一時間目7時35分の始まる一時間前、0時限目に学校に来なさい。あなたがテストを完成して出せるまで、私も何日でも来ますから。約束通り先生は6:35分に毎日来て、とにかく自分の力で皆と同じ試験を最後までやりとげさせてくれました。言葉のハンディがある人に、同じ時間で点数をつけるのは、不公平であるという考え方です。朝6:35分から2日も付き合ってください先生に、「申し訳ありません。今日もまだテストを出せません。」という、あなたがこれで出す判断するときまで私は来ます。Anyway、(なのだから) Michiko, I am your American History teacher! 私は、あなたのアメリカ史の教師なのでから。と笑顔で言われました。同じことを27年後、ミシガンの高校で娘が体験した時には、昨今、かならずしも評判の良い米公立高校ですが、米国の学校教育の基本姿勢が州を越えても存在することを驚くのでした。